

最近歐米史界管見 (上)

文學博士 三 浦 周 行

一 歐米の史風

最近の歐米旅行に於て、私は曠古の世界大戰が史學に向つて直接間接に何等かの影響を齎らしはせなかつたかを注意したが、戰爭中から、別して戰後に於て歐洲文明の興廢消長に關した二つの全く違つた見方が行はれて居るのを見て興味あることと思つた。一つは歐洲文明を呪ひ其將來を悲觀するものである。實際戰爭中敵味方の非文明的な行動は局外者から見て擧げすべきことが少からずあつた。私は佛蘭西や白耳義の戰場をも視察した

が戰爭の慘禍は眞に驚くばかりであつて、例へば佛蘭西の Reims の有名なるカセドラルの如きは獨軍砲撃の目標となつた爲め磔架上の耶蘇の像は片手を打落され立派なゴツドや聖徒の像も首が落ちたり手が缺けて見るも無慘な狀を呈して居た。如何に勝敗の外には盲目的になつて居たからとて物もあらうに國民信仰の標的たるカセドラルの建物も砲火の目標にするとは餘りにひどからう。又あれ丈多くの犠牲を拂ひ乍ら戰後の歐洲の人心は今尙は安定を缺いで、形勢は彌が上にも險惡となりまさり、國民道德は頽敗墮落の深淵に沈みつゝ

ある。これを見・聞くにつけ、世界諸國の何れよりも、遂に卓絶したと自他共に許しつゝあつた歐洲文明に對する信仰の薄れ行つたのは當然と謂はねばならぬ。千九百十七年に第一卷を出だし、昨年第二卷を續刊して、讀書界を騒がした Oswald Spengler 氏の *Der Untergang des Abendlandes* を縱し著者が歴史家でなく又其論據は必ずしも歴史的事實に立脚しては居ないにもせよ、文化の過程よりして西歐文明の衰亡を論じて居る點は亦此派を代表した一種の史論といへやう。

それに反して他の方面では全く反對の觀察が行はれて居る。Spengler 氏の説に對しては獨逸國民中これに共鳴するものゝ多いことは其素晴らしい賣行に徴しても明かなことであるが、中には獨逸の國運の發展に失望の空氣と氣分を作り國家の前途を毒するものとして非難を加へるものもないではない。大學でも老教授は多くそれに傾いて居

るが少壯教授及び國民の多數は事實に當面すべしといつてス氏に與みするやに聞こえた。併しそれが獨逸の敵國であつた佛蘭西や英吉利側に行くに反對に世界大戰の結果を見て歐洲文明殊に羅甸文明の勝利に歸するものがあるから面白い。佛蘭西のリセー (Lycee) に於ては千九百二年前は羅甸語を全部必修課目として居た上に、希臘語は選擇課目であつたけれども、第三年級位の割合に初年級から始めて居たのであるが、千九百二年からは、近世科學の進歩に順應させる爲めに、羅甸・希臘語の時間を減じ、リセーの語學を四科に分けて、第一科は羅甸・希臘語、第二科は羅甸語と二つの現代外國語、第三科は羅甸語とサイエンス、第四科はサイエンスと二つの現代外國語といふ事に改めた。併しこれに對しては夙に反對論もあつて、其主たる理由は、青年に向つて斯様に早くから自己の志望を決定させるは不自然であり、又初めから斯る分科

をなすは不條理であるといふのであつた。然るに文部大臣は去年衆議院に向つてリセーに於ける羅甸・希臘語の授業時間の増加を提案したが其理由は過般の大戦が希臘、羅馬の文化の影響を受けたものゝ勝利であつて而かも眞によく此文化を傳へて居るものは我佛蘭西の外ないから、今少しく餘計に羅甸・希臘語の時間をリセーに加へねばならぬといふにあつた。私の昨年六月始めて巴里へ参つた頃には議會は勿論民間に於てもこれに關する可否の論議が頗る盛んであつたが、國民の輿論は一般に此文部大臣の提議に賛成の様に見受けられたに拘らず、大學がそれに反對するの奇觀を呈した。これ畢竟千九百二年の改革時代の教授がまだ生き残つて居るからだとの事であつたが、果して如何であらう。それは兎も角、戦後希臘や羅馬の文明に對する憧憬からそれらに關した研究著書の相次いで出でたのは事實であつて、彼 F. S. Mari-

vin 氏の編輯に係つた Unity Series の如きも、其一つと謂ふべきであらう。此 Series はすべて五冊から成つて居つて、各方面より歐洲文明が文明のユニチーであることを高調しものであるが、縦しそれには又有力なる反對意見があるにもせよ、確かに前とは正反對の思想が一部の國民間に勢力あることを物語つて居ると思ふ。

併しこれは佛蘭西ばかりでなく、英米でも戦後クラシックとサイエンスとの教育上の輕重が問題にならぬところははない。何れかといへば戦後の日常生活が世智辛さを加へると共に、一層エツファイセンシーに重きを置き、従つてサイエンスを重んじ實業を奨励するに傾いて居る。佛蘭西の如きも文部大臣の提案に輿論の反響はあり乍ら、多數の青年學生の志望は矢張金儲の仕易い技師となるにあると謂はれ、クラシックとサイエンスとの選擇は自然に資産階級の學生と無産階級のそれと

併しこれは佛蘭西ばかりでなく、英米でも戦後クラシックとサイエンスとの教育上の輕重が問題にならぬところははない。何れかといへば戦後の日常生活が世智辛さを加へると共に、一層エツファイセンシーに重きを置き、従つてサイエンスを重んじ實業を奨励するに傾いて居る。佛蘭西の如きも文部大臣の提案に輿論の反響はあり乍ら、多數の青年學生の志望は矢張金儲の仕易い技師となるにあると謂はれ、クラシックとサイエンスとの選擇は自然に資産階級の學生と無産階級のそれと

の色別をすることになつて居るが、一面には又戦後正則の學校教育を受けるは徒らに多額の費用を要する上に就職の時期を逸する恐れある爲めに愚の骨頂であるとの思想を普及させ、子弟をして成るべく早く自動車其他の機械を取扱ふ職業にありつかせて實地に練熟させ、傍ら簡易な夜學に通はせる風潮が盛んになつて來たやうである。

斯る現代社會の趨勢が年若き學生の腦裡を刺激する結果は、學生をして一般に實際的・現實的ならしめサイエンスに嚮ふものが増加する代りに文科に嚮ふものを減じたやうである。私がソルボンヌの文科教授 *M. Lepo* 氏に遭つた時、此事に話が及ぶと、氏は同大學の文科では哲學、文學を志望するものは多いけれども史學は比較的に少いといはれ其理由として、哲學では現代の社會問題や群衆心理等を研究して將來の活動に資することが出来るし、文學は古代のものも今日のものもあるが、何

れにしても現代社會と密接の關係があるけれども歴史は過去の事實を取扱ふものであつて、現代社會と直接の交渉が左迄深くないからであらうとの意見であつた。それと同一の意味に於て佛蘭西の學界が戦後一層其重要な度を増した經濟社會問題に重きを置く傾向のあることは、私の逢つたソルボンヌの歐洲中世史の教授 *J. G. G. H.* 氏も話されたところである。

獨逸の國情は今尙ほ極めて不安定の狀態に置かれて居る丈、外國留學生は兎も角、獨逸人の大學生で史學に志すものは所に依ると減少を免れないやうであり、私のライプツヒ大學で懇意になつた一カンデイダート杯もさう申して居つた。されば、史學々生の減少は戦後共通の一現象で獨りパリ大學ばかりであるまいと思はれた。

英吉利は如何かといふに、私は同國では最初にロンドン大學を見次にケムブリッジ、オックスフ

オードを見たのであつて、ロンドン大學では先づキングス・カレッジからロンドン・スクール・オブ・エコノミックス・エンド・ポリテクナル・サイエンス、ユニヴァーシティー・カレッジを次ぎ／＼に視察したのである。然るに私が昨年七月ロンドンへ參つて最初にキングス・カレッジの中世史及び近世史の教授 Hearnshaw 氏を其教授室に尋ねた時、ソルボヌヌの史學志望學生の減少の話をするに、氏は意外にも本校の Faculty of Arts では却て史學志望者の増加を來たして居るといつて、學生の名や學科目を書いた表を示された。それに據ると、中には二三學課目の記入を闕いたものもあつて、多少不正確の憾はあるが、第一學年では三十八人の中十九人、第二學年では三十人の中八人、第三學年では六十人の中十六人が史學であつた。其他では一年に哲學が一人、論理學が三人、心理學が一人、二年に哲學、社會學が一人、三年に哲學が二人、心

理學が一人といつたやうに哲學關係の學科は其志望者が眞に寥々たるものである。猶ほ氏は私の問に答へて學生増加の原因は種々あらうけれども、歴史的智識の普及も確かに其一つであらうといつて、氏の主として關係されて居るキングス・カレッジの歴史の公開講演の事を話された。講演は二三箇月に互つて數人の講師に依つて行はれるので、豫め講演題目と時日を發表して何人にも聽講を許すが、毎週火曜日午後五時十五分からの開會とて毎回多數の聽講者があるとの事である、氏は昨年の十月から十二月にかけての講演題目を示されたが、それは中世に於ける大思想家の社會的的政治的觀念を主題として取扱つたものである。猶ほ此講演は後に纏めて出版さるゝ例であつて、最近のものは昨年同氏が編纂出版された *Metiaevai Contributions to Modern Civilisation* で、卷頭にはキングス・カレッジの學長 Barker 教授の序文が掲げら

れ、有益なる數篇の論文が收められて居る。私は又キングス・カレッジでハ氏の歐洲中世史の講義を聞いたが、其時は男子の學生が二十人許と女子の學生が三十人許と聽講して居り、ユニヴァーシティー・カレッジで聽いた Pollard 教授の英國憲法史

にはそれよりも稍多數の男女學生の聽講を見た。併し經濟學の學生はそれらにも増して非常に多く別けても、スクール・オブ・エコノミックスは頗る盛況を呈して居た。それに關聯して經濟の史的研究なる經濟史は若き男女學生の興味を惹いて居るのである。これは獨りロンドン大學ばかりでなくケムブリッジ大學に於ても、少くとも數の點からは、現在所謂 Human studies の中で歴史が首位を占めて居り、一昨年 History Tripos の二部に入つたものが、實際三百人あつたとの事である。而かも其増加の傾向が近世史に集中し、又過去十年間經濟學と共に經濟史の方面にも發展しつゝあると

いはれる。オックスフォード亦これと同一の傾向を有つて居つて、其 Modern History School に於ては學生の多數が近世史に集中すると共に、經濟學及び經濟史にも彼等の趣味の増長しつゝあることを示して居る。

こはもとより男女の學生に共通の傾向であるとはいへ、歐米の大學では女子の學生に史學を修めるものが多く、殊に經濟史の専攻者が少くない。私の友人ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス・エンド・ポリテクナル・サイエンスの經濟史の講師 Eileen E. Power 女史から聞いたところによると、ロンドン大學では現に婦人の教授が三名あつて、中一名が史學、二名が經濟史の専門家であるとの事であつた。私はバ女史の紹介で、其中の一人なる Lilian Knowles 女史にスクール・オブ・エコノミックスの同教授室で面會し英獨の研究法の異同について質した事がある。女史はバ女史同様ケムブリ

リツヂのギルトン・カレッヂの出身で、ダブリン大學の Lit. D. である。女史には The Industrial and Commercial Revolution in Great Britain during the Nineteenth Century を題する良著があつて、私も一讀したが、其中には日本の海運業の著しい發達が英國のそれに一大打撃を與へたこと杯にも論及されて居るのを見懸けた。英吉利では女子の學生を認めず學位をも與へまいとするケムブリツヂは格別として、オックスフォード其他の大學ではロンドン同様、男女學生を同等に取扱ひ學位をも授與するから婦人の教員も多いが、史學殊に外國歴史を専攻するものゝ少からぬことも私の注意を惹いた一つである。オックスフォードの Faculty of Modern History の Michaelmas Term には Preliminary Examination の歐維巴史のレクチュアラーに三人の婦人があり、Honour School の一般史に四人の婦人があるが、其三人迄は伊太利

史で残りの一人が佛蘭西の憲法史であつた。其他特殊題目について一人の婦人があり、經濟學及び經濟史に三人の婦人があり、地理學に一人の婦人があつたが、何れも申合せたやうに M. A. である。私は其中二三の講義を傍聽したが、皆ノートの朗讀體で精采に乏しい憾はあつたけれども、内容はよく整つたもので、男女學生の聽講者は畧相半ばして居た。

亞米利加の大學でも戰後は學生が一般に實業的の學問に傾いて史學に足踏みするものが一時遠のいたところもあつたやうであるが、其後は漸次回復してコロムビア大學の如きは、政治學、經濟學、社會學、史學、地理學等を含んだ所謂 Social Studies は學生の數最も多きを占めて居ると聞いた。而して女子の學生の史學に嚮ふものゝ多いことも、略英吉利の大學と一樣であるらしく、私がスタンフォード大學の史學の教授 Treat 氏に聞いて

たところでは其成績概して頗る良好との事であつたが、中には間々、女子が一般に歴史事實を餘りに奇麗に平坦に取扱ふ習癖を免れぬ點を指摘した教授もあつた。

併しこゝに問題となるのは、斯る傾向が果して戦後の新現象であるや否やといふ點であらう。私がパリの國立古文書館で、昨年物故した Lavisse 氏の監修に係る有名な佛蘭西史一部の著者であるところの館長 Langlois 氏に逢つた時、氏は歴史の見方は種々の方面からすべきであつて、政治や戦争の方面に飽いたら又經濟、社會、心理等の他方面に着手するもよいことではあるがさりとてこれは餘程以前からあつた見方で敢て戦後の出來事と謂ふべきではないと申され、又ケムブリツヂで Dr. Clapham 氏の英國經濟史がアーツ・スクール及びキングス・カレッジの講堂共に聽講者の溢るゝばかりの盛況であつたのを見て、講義の濟んだ

後、同氏を其室に訪うた際に、それが戦後の現象であるかを尋ねて見たところが、氏は言下に否と答へて、戦前には却て今より以上の多數であつたと話されたのである。併し私が久方振で舊師 H. Jones 先生にベルリンのデルツフリンゲルの邸で面謁した時、現今經濟史の隆興について話すと、先生はそれがファツションであるといはれ、政治を離れて何の經濟があらうと滔々兩者の關係を述べられた後、近刊の Allgemeine Weltgeschichte を取出してこれは甚だ時代後れの本ではあるがと笑はれ乍ら手交された。

従來の歴史を舊式な毒學問と排して階級鬭爭史への組替を餘儀なくして居るやに傳へられるソウエート露西亞は格別、歐米諸大學の史學の上には目立つて新らしい傾向といふべきものを見出ださぬ。大學の講義題目は何れも月竝なものである。只強ひて言へば前に述べたやうな史風が縱ひ十年

來若しくはそれ以前から馴致されたことであるにしても事實新傾向であるに相違なく、それ以外には學者が從來の因襲や學說に囚はれないやうになつたことも其一つであらう。

ソルボンヌの Jordan 教授も今日の學者は昔の様に一定のスクールに分れて居る事なく、各個人々々が自家の學說を有する有様であるから、非常に複雑であるといはれ、猶ほ私の間に應じて、Marx の唯物史觀は學者各個人々々には幾等か其影響を受けるものもないではあるまいが、もとより一學派をなして居る譯ではなく、全體として影響がないと謂ひ得る、Rickett にしても、哲學には影響があらうが、史學とは没交渉である。併し自分も詳しい事は知らぬから、斯道の人に聞いて下さいといはれたので日本では此頃小學校の先生でも Rickett を口にするものがあり、又其歴史哲學に據つて日本の歴史を研究し教授せねばならぬ

と力説するものさへあるのを思ひ浮べて、苦笑を禁じ得なかつたのである。猶ほ日本では近來文化史流行で政治史を斥ける風潮があるが、Langlois 氏に逢つた時、偶話が彼 Lamprecht 教授の文化史に關する學說の影響に及ぶと氏は軽く獨逸はもとより亞米利加でも一時ラ氏の説にかぶれたものであるが、今は下火の様ですと言つて退けられた。私が後に亞米利加に渡つてハーワード大學の史學研究室で The Significance of the Frontier in American History の著書で聞えた Turner 教授の演習に列した後、偶ラ教授の學說に言及したところが、同氏はラ氏は殆ど歴史を超越して居るものだと評し、自分はラ氏よりも寧ろラ氏の方が優しだと思ふといつて同席の Abbott 教授を顧みられたが、氏も別にそれに對して異存はないやうであつた。

私はライプツヒでは二日に亙つて可なり長い

時間を Lamprecht 教授の Institut で費し、仔細に其各室を巡覽して氏の遺業を面のあたりに見、氏の生前からの助手であるところの Dr. Wedemeyer 氏から此 Institut 及びラ氏に關した二三の刷物を貰つて其高風を偲んだのであるが、それらから得た私の印象を率直に言へばラ氏の廣博にして殆ど際涯なき識見に基く新史學の建設は不世出の一大天才的史家が其手足としての卓拔なる多數の助手を包擁して始めて達成し得らるべきであつて、他の企及を許さぬものであらうといふに歸着する。ラ氏が提唱した文化史・世界史の研鑽の至難な事業たる事はラ氏の後繼者たる Goetz 教授も其 Archiv Für Kulturgeschichte, XII. に載せた Das Institut Für Kultur-und Universalgeschichte An Der Universität Leipzig の論文の中に力説されて居るが、それは次項の説明に譲ることゝしやう。けれども現代の史學者少くとも青年學生の間には從來

の史家の單なる事實の記述を慚らずとする傾向があるやに思はれ、此點に於ては自然ラ氏の重きを置かれた思想史に共鳴することにもなるのである。私がケムブリッジ滞在中英國近世史の講師 Ten-Perley 氏に誘はれて Peterhouse Historical Society に臨んだことがある。當夜ラ氏は其得意とさるゝ第十八世紀の對外政策と題する論文を讀まれ、終つてデイスカッションに移つてから、若い卒業生や學生が交々起つて忌憚なき各自の所見を述べたが詳しい事は他の項に譲るけれども、大勢はラ氏の講演に外交史と密接の關係を有する Spirit of the age の閑却されて居たことについて不滿を抱いて居るものゝやうに見受けられたのは其一例と看做してよからう。

猶ほ史學に關する權威ある著書は各國其餘り出でないやうであつて、私が Langlois 氏と此事を話し合つた時、氏も戦後歴史を書く人が少くなりそ

れに經濟上の事情も伴つて一向戰前程の良著の出でないことを痛歎されて居つた。經濟上の事情とは畢竟學者に夫程の餘裕がないのと出版費の嵩む爲めとであらうが、これこそ疑もなく學界に及ぼした戰爭の影響と謂へやう。其中でも佛蘭西では同國學界の耆宿 Académie française の Lavisse 氏監修の Histoire De France が頗る高評であつて別してラ氏執筆の總論は論旨も堂々、文章も流麗だと持囃されて居たが、私の逢つたソルボンヌの某教授(特更に匿名にする)はラ氏は文章家であるけれども史家ではないと評して居つた。獨逸は遠に學問の淵藪であつて、戦後も續々と立派な本が著された中に東洋の美術史に關する大著さへあるには驚く杯との話を聞かされて居たが、行つて見ると成程あるにはあるけれども、大抵はナイフと糊とで作り上げたやうな間に合せもので、格別の創見や苦心の跡は見受けられなかつた。出版費の

嵩むことにつけてこゝに書添へて置きたいことが一つある。それは私が昨年九月中頃 Lamprechts Leipziger Institut 卽ち W. demyer 氏に逢つた時氏は今は東京商科大學教授の三浦新七博士の留學中協力して著された我今の註釋を示されたが、これは今の本文の外、義解・集解の文をも全譯してそれに註釋を施されたものである。私は兎も角斯る苦心の結晶が經費の關係より未だに世に出でぬは遺憾であると思つたから、試みに千部を印刷するとして何程の出版費を要するやを即座で同氏に見積つて貰つたところが、約千頁餘のもので、當時の爲替の相場に換算すると、其實費、我千圓にも足らぬ高であつたので、私は日本に於て出資の途がない譯でもあるまいとウエ氏にも話して早速三浦博士に此事を申送つて置いた。ウエ氏は非常に満足されて私の羅馬滞在にも態々感謝の意を申越されたのである。私は如何にもして同書の早く世に

公けにされんことを望んで已まない。

二 史學研究室

史學の進んだ研究に當つては是非其研究室の必要を感ずるのであるが佛蘭西や英吉利の大學には其設備が完全でない。ソルボンヌの文科にも、特殊の研究を容易にする目的で *Instituts* が設けられて居り、其中史學に關係あるものに考古學、美術史、地理學等があつて、それ〴〵研究上に必要な圖書室、實驗室を置き、地圖、寫真等も備へられて教授の紹介又は學長の許可を得た學生に限つて出入を許されるし別に *Salles de Travail* もある。大學の一覽を見ると、研究に必要な機關は全部備具して居るやうに見えて居るけれども、實際は餘りよく出來て居ない爲め、研究者に取つて充分の満足を與へられぬ事は前記の *Jordan* 教授が私に語られたところであつて教授自身は比較的設備

のよい *Ecole Normale Supérieure* の研究室へ行くことにして居られるが、そこには古文書も備へられて居り、學生には中世のテキストを有たせて教授する、大學生も入室は出來るが全部には許さぬさうである。勿論必要な史料は大學の圖書館なり國立古文書館に所藏されるのであるから、學生はそこへ行つて研究することが出来る。併し國立古文書館に藏する史料は主として佛蘭西のそれであるから、歐洲中世史別して獨逸や伊太利史の専門の *ジョ*氏は自然餘り利用されないとの話であつた尤も法科にも各學科に分れて特別の圖書を備へた *Salles de Travail* があり法制史に關しては *Salles d'histoire du droit et du droit Canonique* や *Salles de travail de droit romain* とがあつて、前者に於ては私の逢つた寺院法の *Fournier* 教授が佛蘭西法制史の *Meyrial* 教授と共に指導教授となつて居る。私はそれを見る機會がなかつたけれど

も、フ氏の話では一通りの参考書が備へられ何人でも特許を受けたものはこゝに入つて研究をなし得るのであつて教授の助手から指導を受けるのであるとの事であつた。猶ほパリ大學の法科では第一年に必須科として法制史を課するは日本のそれと違ふが、フ氏自身、學生が一般にこれに必要な歴史的智識の貧弱である爲め効果があらぬと歎息されて居たのを見ては私みづからの經驗より同情に堪へなかつた次第である。

これを要するにパリ大學の如きは設立が古い丈に圖書館が完備して居つて、學生の一通りの研究には事關かぬ上に一國の首府にある爲め國立古文書館、國立圖書館、官公私立の博物館等も全備して居つて、それらを利用するに於ては進んだ研究をも辨じ易いところから、自然史學に於ても研究室の設備が發達せぬ譯であらう。

次に英吉利の大學の研究室はというと、此國で

は科學方面のラボラトリーはあるけれども、文學殊に史學に特別な設備の觀るべきものは少い。先づケムブリッジ、オックスフォード兩大學についていへば、オックスフォードの Feiling 氏の Sources and Authorities for English History の講義では私は初特別の設備のある室で學生に史料を示しての説明でもあることかと豫期して行つたのに Christ Church の一室で、出版した史料の解題、所藏の場所(大抵大英博物館)著者の略傳を説く丈であつて、それさへ殆どボールドを使はず、難解の文字はスペルをいふ丈であつた。段々マヌスクリプツに及んだならば或は原本を示さるゝか知れぬが、印刷したものでさへ、其大英博物館にあることを指摘された位であるから、一層原本の持合せがなくて、只説明丈に止まる場合が多くはなからうか。それから古文書の講義では私はオックスフォードで Love 講師の Int oductory and gene-

ral Course in Latin Palaeography & Anglo-Saxon Charters どの講義を聴いた。此講義は開講前豫め講師の宅へ聴講者の名を届け出でることになつて居たので、私も手紙で希望を申送ると、早速氏の方から自分はあなたを歓迎するが聴いて見られたらつまらなくて失望されるだらうとの返事が来たので、今度は學生の人数を制限される丈何か特別の設備があるだらうと The Schools へ行つて見ると、階下の割合に狭い普通の教場で、前者は男女各五人後者は減つて男學生二人女學生一人となつた。氏は私を見付けて愛想よく握手され他の學生と一緒に一つの教科書を見る便宜を與へられたが、初めの時間にはバリ出版の Dr. Franz Steffens の Palaeographie Latine を持つて來て學生に與へ、中にある文書の寫眞を三四行づゝ輪讀させて其意味の説明をされ乍ら形式を説かれ、次ぎの時間ではアングロサクソン時代のチャーターの寫眞版を

持つて來て學生に頒たれ、これも前同様學生に輪讀させて、書き崩された文字を學生が讀み尋ねると、これは Curious combination だといつては自身ポールドに離れゝに書いて見せ抔されたが、遂に我々がやるやうに、原本を出して示すといふことはされなかつた。ケムブリッジではロンドンのパブリック・レコード・オフィスで私の懇意になつた Jenkinson 氏が矢張ケムブリッジの出身であるので、毎週一回出張して古文書の講義があることであつたが、私は時間の都合で、其講義は聴かなかつたけれども、定めめの教室を見ると、割合に狭くて細長い何等の設備もない普通の教場であつた。聞けば氏は平生極めて多忙な人であるので講義を濟ますと直様歸つて仕舞はれるさうである。尤も Seminar といふものが全くないではなく、例へばオックスフォードで Vinogradoff 教授のヘドワード三世時代と題する講義は The Schools の

Seminar で開かるものになつて居た。これは所謂 Advanced Historical teaching の爲めにするものである。其外に授業料を取つて（取らぬのもある）質問を許す Informal instruction というのもあるが、是等は寧ろ稀れな場合で、大體は Seminar がないのを原則とするのである。

ケムブリッジ、オックスフォードに特有の Tutorial system の史學の場合に於て其専門の學生が Tutor から指導を受けるのは事實上稍 Seminar のそれに類して居ないではない。私はケムブリッジでは英國文部省の紹介で懇意になつた Peterhouse の or, Tem Assistant tutor, Temperley 氏の特別の好意で氏が學生の指導振を氏の側で視察する機會を與へられたが、學生の氏から課せられた小論文について質問をし乍ら批評して行かるとのであつた。其後オックスフォードの Brasenose で Wakeling 氏の Tutor 振りをも瞥見したが、矢張り同じ事で

あつた。是等は何れも個人指導たる點に於て普通の Seminar とは違ひ又 Tutor の室は史學に關する圖書で架上を満たされ居るものゝ、學生がそれを利用する譯でもないから、此點も相違して居るのである。私は Seminar の事をテ氏に話した時氏は自分は Seminar は有たないが個人指導はして居るといはれ、ウエー氏はこゝで學生の研究狀況が知りたければ、圖書館に於て見られるの外あるまいと教へて呉れた。これがオックスフォードやケムブリッジの現狀である。

そこへ行くとロンドン大學は新しい丈に前記兩大學とは種々の點に於て行方を事にした多少の設備がある。例へば彼兩大學では其學生を各カレッジに收容するを原則として居る。けれどもロンドン大學では學生の多數（六十パーセント）が家庭から通學するのを以て多大な便利とし、寧ろ遠隔の地方から同大學に入學するもの七十パーセント許

に及ぶ Postgraduate & Research students の爲めに寄宿舎を設けて彼等をしてロンドンの中央に住み乍ら、圖書館や大英博物館、レコード・オフィス、大學の研究室等を容易に利用させる方が優しだと主張して居る。斯くて日本では後から出來た大學は何かにつけて兎角古い大學の眞似をしたがるに拘らず、英吉利では個人間に個性を重んずるが如く、大學間でも It is a great advantage to have Universities of different types をつて居るのである。(Sir Gregory Easter 氏のロンドン大學に於ける演説)

無論この Seminar はないけれども、私の見たところでは、ユニヴァーシティー・カレッジで英國史の教授 Pollard 氏の室に續いて史學の圖書室、讀書室があり、そこを出でると、英國史の圖書室がある。それは只一室ではあるが、天井迄も本棚が届く程高く積まれてあつた。それに接して佛蘭西

伊太利、英文學、哲學及び心理學、考古學等の各室があつて、それからゼネラル・ライブラリーに續いて居る。故に前者はデバートメンタル・ライブラリーで、是丈でも餘程學生には便利であるが、こゝには又別に Institute of Historical Research といふのがある。それは大英博物館の裏手に當りユニヴァーシティー・カレッジから程近いマレット・ストリートにあつて、見たところ木造の細長い平屋建で、British Institute of international affairs の標札を滑稽に感ずる程、新しいには新しいがお粗末な建物である。私は前後二回こゝをおとづれてロンドン大學のリーダーとしてロンドン史には明るくそして雜誌 History の編輯人であるところの Davis 女史の御世話になつたのである。女史は平生こゝの名譽圖書館長として、何時も其入口に近い一室に詰めて居られる長身瘦軀の老嬢で、令妹も同じく、こゝで圖書に關した事務を執つて居ら

れるとの直話であつた。私は最初は女史の案内で、二度目はロンドン大學の新卒業生 Parloe 氏の案内で參觀したのであるが、内部は遠によく整頓されて居つた。先づ入口近くから順々に觀て行くとき、最初がコンモン・ルームで、五六のテーブルに二十許の椅子が置かれて雜誌類を備へ附けられて居る。次が東部歐羅巴の室で、中央にテーブルを置き、書架に本が置かれる。此邊廊下にはカタログ箱が並んで居る。次の歐羅巴室は稍廣い長方形の部屋で、佛蘭西、日耳曼と國々の史籍が時代別に書架の上に陳べられ、五つのテーブルを置かれる。其隣りが狭い英吉利外交史の部屋で、ステート・ペーパー・ス杯が書架に立てられテーブルは二脚ある丈である。次が戦争の中で海軍の作戦の部屋で陸軍作戦の部屋と隣り合つて居る。そこにはテーブルが二つある丈であるが各國のを集めた珍らしいコレクションが廊下に迄溢れて居る次

に大きな部屋に突當るのが大英國及び愛蘭即ち英吉利の國史の部屋で此 Institute の中心丈に比較的最も多くの圖書のあること勿論である。即ち Roll Series が無慮四百冊 Record Sources が亦略同じ位架上に立て陳ねられて居るのは壯觀であつた。次の小さな部屋が古 パレナグラフ・ランド・ディオロマチック 文 書 室で、二つの卓を置き室内の棚には版になつた大英博物館あたりの古文書が藏められて居た。コール・マインで作つた一種の棚にマヌクリプツの版になつたものを横たへ、外部にグリーングリーンの幕を張り、上げ下しの出来るやうにして常は暗くして置くのは、保存上からのよい思ひ付きであると見受けた。此部屋は古文書専門の Jenkinson 氏の設計に成ることであつたが、此ブック・セルフ即ち書架の構造は親切なデ女史が私の爲めに其場で寫生して贈られた。次の部屋がロンドンの室で一切のロンドン關係の本が集められ、デ女史得意の獨壇場と

思はれた。其次が英國の領地殖民地及び印度の部屋であり、最後が亞米利加の部屋であつた。長い廊下には一面に前記のカタログ箱の外、室外に溢れた本やタイムスなどが陳べられて居た。

此 Institute は一昨々年から一昨年にかけて或匿名の特志家の二萬磅の寄附で建てられ設備をされたもので、其建設と維持とについては教授其他の寄附を仰いで居る。前記の各室はそれ／＼専門の教授を指導者として居るけれども、ロンドン大學に於ける史學教授の牛耳を取つて居る Pollard 教授は Chairman としてこれを主宰して居ること故 Lamprecht 教授の Institut に於けるが如きものであらうと思はれる。氏はオックスフォードの出身で Dictionary of National Biography の編纂を終つてからロンドン大學の聘に應じ、夫迄何とかいふ海員上りの教授が擔任して居た爲め一向振はなかつた後を承けて氏の努力がロンドン大學の

史學の面目を一新して今日あるに至らしめたとは Mrs. Pollard から私の聞いた話である。

此 Institute は英吉利の國史研究を主としたもので、學生が史學研究法に據り古文書利用の練習をなすを其目的として居り、ロンドンにあるバブリック・レコード・オフィスとか大英博物館とか其他の政府の古文書館に代はるべきものではなく、寧ろ學生に何を搜し又如何にしてこれを發見し利用すべきかを教へ、斯くして彼等及び古文書館の管理者の勞力を省かうとするものである。畢竟 A Centre for Advanced Historical Studies たるを以てみづから任ずるもので、其理想は頗る高いけれども、何分にも創立以來日がまだ淺い爲め、圖書、古文書等の蒐集も普く行はれて居らず、架上の本の疎らであるのは是非ない事と謂はねばならぬ。Pollard 氏自身も其完成には多くの年月を要すると話され、其委員の一人なる Hearnshaw 氏

も今後十年も経たらば觀るに足るものとならうといつて居られた。私は千九百廿一年から二年へかけての Seminar の假表を貰つたが、中には Poindard 教授の English Constitutional History in the 15th and 16th centuries 其他私の知合のロンドン大學やケムブリッジ大學の教授以下の人々の各自專攻の題目が掲げられて居る。猶ほ毎週木曜日の夜にはロンドンで歴史關係の人々が此 Institute に集つて種々の打合をするとの事で、私にも出席を勧められたけれども、丁度當日は私がケムブリッジへ旅行する日と合つた爲めに其意を果たさなかつたが、後にエールの英國法制史専門の Ad-

青木昆陽傳補訂

青木昆陽の事蹟はこれまで種々の方面を多くの

ans 教授からも其會合の有益な事を聞かされて一入遺憾に思つた次第である。

斯様な譯であつて、今日では尙ほ完備の域に達して居ないにも拘らず、此 Institute は英吉利では新しい試みとして學界の注目を惹いて居るが、獨逸に行けば、決して珍しいものでもない。故に英吉利に於て何故にそれが獨逸に後れたか、又それが將來果して英吉利で發達を見ることが出來やうか、是等の問題について考へる前に一應獨逸の諸大學に於ける Historisches Seminar や Institut の説明に移ることとする。(此項未完)

文學博士 新村 出

人々が細大にわたつて著述したものが知られてゐ